

桜蔭俳話会 七月句会 (第三二七回) 鑑賞と添削

【鑑賞】

手ぬきとは言はせぬ薬味冷奴

友子

連日連夜の猛暑。火を使う料理は出来れば敬遠したいところである。今日は冷奴と宣言した時、「また」という男性陣のつぶやきが耳に届いたような気がする。これに触発されたどうかは知らないが、「手ぬきとは言はせぬ」は、日々調理する者として、ある意味で啖呵を切ったのである。冷奴の薬味で勝負するといっても、その変化の範囲は自ずと限定されていると思えるが、諧謔性に優れた一句である。

【鑑賞と添削】

明日葉の苦み原発再稼働

明美

原発の再稼働問題は、賛成するにせよ反対するにせよ、まさに苦渋を伴う判断を国民に突き付けている。明日葉は、健康に良い成分を豊富に含んでいる反面、特有の苦味成分もある。明日葉の苦さと原発再稼働を対置したのは秀逸である。

評者も互選途中では特選句にとろうとしたが、やはり明日葉は春の季語なので、最終的には特撰句は別の句にした。月例会会ではその月が属する季語に重きを置きたい。明日葉に代えて夏の植物の酢漿草を用いれば、次のようにすることもできる。

酢漿草を噛む原発の再稼働

【鑑賞と添削】

ベランダの守宮まばたきしてみたり 清子

守宮の瞬きを発見したのは素晴らしい。客観写生の力である。評者も帰宅して玄関の錠を開けているとき、守宮が上から落ちて来たことがある。ここで問題となるのは「ベランダ」である。守宮がいる場所の特定化手段に用いられており、季語性は微弱であると考えられることもできる。ベランダの言葉を消すとして、どのような言葉をいれるかである。作者は守宮を一定時間みつめることによって、そのまばたきに気付いたのであるから、そのような場所設定や時間設定も重要な事項である。ベランダに植木鉢がおかれていたとして、次のようにすることもできる。

鉢ひとつ守宮まばたきしてみたり

【鑑賞】

羅馬字の小さき表札日々草

秀一

俳句は和歌と同様に耳から入る詩歌であり、音律・リズムを大事にするのであるが、視覚的な面も疎かにできない。この句は、「羅馬字」と表記したことによって多くの賛同を得た。日日草との配合が良い。

【自句自解】

石灼けて石みなほとけ遊女墓

守

ある吟行句会で三ノ輪の浄閑寺を訪れた。旧吉原大門の近くにある遊女の投げ込み寺である。じりじりと焼け付くような炎天の墓域に佇むと、「石みなほとけ」の言葉が自然に湧いて来た

【自句自解】

捨て切れぬ夢の余韻や遠花火 守

花火は、視覚と聴覚の一方または双方を用いて詠まれる夏の代表的な季語である。遠花火に夢の余韻を感じて掲句が得られた。夢には成就したものとそうではないものがあるが、人は夢をいつまで追い求めるもの。希望と言い換えても良い。成功の余韻に浸ると言うのが、普通の使い方であろうが、不成就の夢の余韻とは何なのであろうか、作者にも解らない。

【鑑賞と添削】

万緑の集落ひとの世の軋み 明美

行政的には限界集落と規定される、一見すると穏やかなそれは小さな村落において、近隣との人間関係に起因すると思われる惨劇が発生した。作者は、事件の底流にある加害者と被害者の感情の錯綜や行き違いを「人の世の軋み」と括り取った。有季定型の俳句の力は、的確なる言葉の選択によって、只事でない事象も言い表せるのである。

【鑑賞】

足裏に馴染む板の間大暑かな 幸

素足で又は靴下一枚を隔てて大きな日本家屋の板の間に立ったとき、ひんやりした板の温度とそれまでに居た外気温との隔たりを詠んだものである。磨き込まれた板の間の存在感が、見事に浮かび上がって来る。

【鑑賞】

大蟻のひとつせはしき厨かな 秀一

好物の砂糖や他の食料を求めて台所を蟻が忙しく歩き回っている。食事の準備のために台所に踏み入った作者は、その蟻を追い払ったり、潰すことなく調理を進めた。詠んでいるのは、蟻と作者が台所に共存している事実だけである。蟻の動きは本来的にせわしいものであるから、せわしく動く蟻なる表現は、蟻という季語の説明ととられることもある。

しかし、評者には、「厨でせはしく」と敢えて言うことによって、命の持続のために動き回る点においては蟻も人間も生命体としては同じであると言っているように思える。

【鑑賞と添削】

老う母のひと味うまき胡瓜もみ 友子

老練な母の手料理はいつも一味違う。工夫をあまりよく加える余地がなさそうな単純な料理である胡瓜もみで

さえそうである。老いた母への畏敬の念の吐露である。

俳句の表記から言えば、「老う母」は「老ゆる母」であるが字数や音調を考慮して、次のようにすることもできる。胡瓜もみの味が分かる作者の年代を考えれば、その母親は老いているであろうことが普通であるから、「老」は省略できよう。

母いつも一味違ふ胡瓜もみ

#### 【鑑賞と添削】

奥座敷精進料理夏の山

直子

いわゆる三段切れの句になっている。簡単に直せば、「奥座敷の精進料理夏の山」ということになるが、これでは、精進料理を奥座敷でいただきました。その座敷の窓の向こうには夏山が広がっていました、の句になる。俳句は上五、中七、下五の十七音構成であるが、これは原則であり、上五については七音まで許されている。すなわち五音を超える言葉は句の冒頭に置くのである。比喩的に言えば、乗物に重たい荷物を持って乗り込むとき、その荷物を網棚に放り上げるように。精進料理は普通、座敷でいただくものであるから、奥座敷は省略できる。そうすると、掲句は、次のようにすることができる。

精進料理窓いつばいの夏の山

#### 【鑑賞と添削】

梅雨空に滑り転んだ野草園

直子

梅雨空にめげずに野草園を巡ったときの句である。「滑る」、「転ぶ」によつてそのときの情景が目に見えかぶ。俳句では、動詞などの用言は一句に一つが良いとされている。季語を二つ使用すると同様に、何を詠みたいのか焦点がぼけるからである。ただし、これは原則である。掲句は、足を滑らせ、転びながら、野草園を回ったことを言いたいのであるから、両方を一句に入れば、次のようにすることもできる。「転び」は、「まろび」と発音したい。

梅雨空や滑り転びて野草園

#### 【鑑賞】

朝顔やとところどころに我を待つ

邦子

散策路のところどころに咲いている朝顔に着目したのが良い。「我を待つ」ということによつて、その散策路が通い慣れた路であることも分かる。

#### 【鑑賞】

今の雷届きしかと問ふ長電話

友子

普通なら、「今の雷落ちしやと電話来る」と作るであろうが、今の雷鳴は届いたのかと安否を確認した後、長電話に入ったと言っているのである。雷と電話の取合せの句は沢山あるが、長電話してしまったというのは新しく、俳諧味がある。

【鑑賞】

バス停の会釈遅れしサングラス ツル子

人の判別には目は重要な要素である。濃いめのサングラスに会釈が遅れるとは、良く分かる。

【鑑賞】

ざぶんざぶ音する路地や月涼し ヤエ子

水音に代表される生活の音がする路地と月涼しとの配合が良い。「ざぶんざぶ」の表現も面白い。

【鑑賞】

羅の秘めたる恋の根付かな 幸

鈴木真砂女の句以来、うすものと恋を取り合わせた句は枚挙にいとまがないほどあるが、根付で渋く締めたところが良い。

【鑑賞】

蝉の声片付け事の急かされり ヤエ子

蝉の声に追いたてられるように片付け仕事をしている実感が出ている。

【鑑賞と添削】

海水着口いつばいの塩むすび ツル子

砂浜のパラソルの下に海水をしたたらせて駆け戻った子供が、塩むすびを頬ばっている情景である。このままでも良いが、俳句では音の響き合いも重要であるから、「海水着」を「潮浴び」に置き換えて、「塩むすび」と頭韻(シ)を合わせるのも良い。そうすると、掲句は次のようになる。

潮浴びや口いつばいの塩むすび

【鑑賞と添削】

夕暮れの海辺へ浴衣の子等急ぐ 友子

夏休みに海辺の保養地へ家族旅行したときの句であろう。浴衣に着替えるのももどかしく砂浜へ急いだ子供の姿が目につかぶ。ただし、原句では、一字の字余りである。また、海辺は比較的広い地域を示す感じがするから、別の表現に置き換えたい。そうすると掲句は、次のようにすることもできる。

夕暮れの渚へ急ぐ浴衣の子

【鑑賞と添削】

みづうみにいつまでも浮く蝉ひとつ 明美

湖水に漂う蟬の亡骸は、死してなおこの世に漂う魂を象徴するようである。

ただし、原句のままでは、散文調のきらいがある。「いつまでも浮く」である。「いつまでも浮く」を、「沈まぬ」に言い換えて、次のようにすることもできる。

みづうみに沈まぬ蟬のひとつかな

【鑑賞】

畳屋の一日永し朝ぐもり

清子

畳屋が顧客の庭先にひいた莫蔭にどっかり座り、諸道具を並べて空を仰ぐと朝曇りであった。暑熱にまみれた一日仕事になることを予感しつつ仕事に取り掛かる職人の姿が目には浮かぶ。この職人としては畳屋が一番相応しく、他の職種、例えば植木屋では駄目である。切れ目なく仕事を続ける畳屋なればこそであり、仕事時間よりも休み時間が長そうに見える植木屋では、「一日永し」が効かない。

【鑑賞と添削】

盆詣り並ぶ墓石に小猿かな

幸

旅の途次、ある寺を訪れたとき、多くの墓石の天頂に子猿が座っていたとのことである。「並ぶ」を省略して、次のようにすることもできる。子猿の頭数は音調を考えて五匹にした。

迎へしは子猿の五匹盆詣り

【添削】

山開き薬王院や天狗焼

直子

薬王院の鎮座する山の山開きの日、その境内で名物の天狗焼を頬張ったとの句であろう。これも三段切れである。次のように直せる。

天狗焼薬王院の山開き

【添削】

教え子の届けて嬉し初西瓜

邦子

「届け」では、教え子が届けて来たのか、教え子へ届けに行ったのか、判然としないところがある。また、句中で作者の感情をダイレクトに述べない方が良い。読者が感じとるようにすれば良い。初物を貰えば誰れでも嬉しいから、わざわざ嬉しいという必要はない。掲句は、次のようにすることもできる。

教え子の送り来たりし初西瓜

【添削】

友よりの絵手紙かざり涼を呼び

邦子

友よりの絵手紙にある涼しさよ

【添削】

高尾山ケープルカーで涼しけり

直子

俳句では、濁音の「で」は使わないようにする。掲句は次のようにすることができる。

高尾山ケープルカーの涼しさよ

【添削】

蚊とり番夜中に二度も起きて焚き

邦子

「起きて焚き」の「起きて」はいらない。起きているからこそ、蚊取線香に火をつけられるのであるから。次のように「夜中」を「一晚」すると、数詞を順序良く配列した句になる。数詞を上手く配置すると、俳句のリズムが良くなる。

一晚に二度も焚きたる蚊遣香

【添削】

夾竹桃香に迎えられ送られて

邦子

夾竹桃はあまり香り立つものではない。枝や幹のしなやかな揺らぎや戦ぎ(そよぎ)に着目すれば、次のようにすることもできる。

送迎は夾竹桃の戦ぐなか

【添削】

疲れても祭りの日かな花火見ゆ

直子

祭も花火も夏の主要な季語である。どちらか一方に絞ること。

疲れたる身を引き起こし遠花火

【添削】

寝苦しさ開き直りぬ団扇風

清子

寝苦しさを目を覚まし、開き直って団扇を手にした句であるが、目覚めたのは寝苦しさである原因を単刀直入に一つに限定しない方が面白い。次のようにすると、夢見が悪くて目を覚まし団扇を扇いているということをも、読者に想像させる。想像域の拡大である。

目の覚めて開き直りの団扇風

【添削】

夏大樹富岡歴史の生証人

幸

句材が盛り込み過ぎかも知れない。大樹を生証人であると見た立っているようであるが。

歳月の富岡製糸夏落葉

【添削】

絵手紙に団扇の風を送られし

ツル子

絵手紙へ団扇の風の届きけり

【添削】

作業衣を夜濯するやあした晴れ

ヤエ子

夜濯の作業着明日は一時晴れ

【添削】

満水のダム山脈の郭公鳴く

幸

満水のダム湖の湖面遠郭公

【添削】

駆け上がる二階に見えぬ遠花火

ツル子

駆け上ぐる二階むなしき花火かな

【添削】

洋装の老女住みをり葎障子

ヤエ子

和洋の違和感を言いたいのであれば、その女性が老人であると明記する必要はない。麗婦人とすれば、年配の女性を想起する。

葎障子より洋装の麗婦人

【添削】

紫外線注意情報梅雨明けぬ

友子

梅雨が明けると直射日光の紫外線が強くなるのは、よく知られていることであるから、原句のままでは、梅雨明けから予想される事象を単に説明しただけである。紫外線注意情報の次に来る結語部分で、読み手にとってそれこそ予想外の季語を配するのが良い。俳句には、予想外の言葉やフレーズの配合による落差や肩透かしを愉しむ一面もあってのではないか。紫外線情報が出るのは梅雨明けだからです、という几帳面な句立ての殻を打ち破ったジャンプである。

例えば、今回の句会の他句に現われた日日草を使用すれば、全て漢字だけの一句となり、これはこれで緊張感のあるすっきりした句形となる。また、「日」は大陽であるから、「日日」と繰り返すことによって、毎日直射

日光に曝されることの暗示もある。

紫外線注意情報日草

【添削】

花莫蔭を抱へおちこち蔭求め

ヤエ子

日陰を求めて花莫蔭をあちらこちらと移動させている作者の姿は目に浮かぶ。でもこの句立は散文的であり、俳句としてのインパクトにおいて少し欠けている。花莫蔭を抱えた作者があちこち移動することを、平面座標におけるてんのいどうであると客観的に捉えて、次のように表現することもできる。

花莫蔭の蔭を追ひ来し座標点

【添削】

夜もすがらはかなき句ふ月下美人

ツル子

月下美人が夜に開花し、その一夜限り、特有の匂いを周囲に充満させ、翌朝には萎んでしまうことは、月下美人の属性として広く知られていることであるから、原句のままでは、月下美人を説明した句に終わってしまう。開花するまでの長い準備期間とその絶頂期の短さを、長い人生における一瞬の光芒の儂さに捉えて、次のようにすることもできる。

歲月のはかなさ月下美人かな

【添削】

冷房のききて連弾コンサート

真三

原句のままでも良いが、コンサートホールの冷房が、コンサートの楽音の妨げとならないように、静かに作動しているとして、次のようにすることもできる。「しづかに」と置くことによつて、ときに激しく鳴り響くピアノ連弾との対比が可能となる。

冷房のしづかに連弾コンサート

(文責 代表 増田 守)